

音楽グループ

1 音楽グループにおける「表現」の定義

「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で作られた音や音楽。

従来の音楽の授業であれば、「鑑賞」活動は他者の演奏を静かに聴く活動のように考えられる傾向が見られる。また、歌唱、器楽、身体表現、創作等の「表現」活動であれば、西洋和声を基盤とした記譜された音楽を再現する活動、手遊びやダンス等の動作模倣を行う活動等、児童生徒が教師の示範に従うものを想定した、分離した活動として進められていく傾向が見られる。音楽グループの研究では、「鑑賞」を「身体を通した知覚」、「表現」を「身体を通した音や音楽による表出」として幅広くとらえ、互いが綿密に絡み合い、新たに音や音楽を生み出していくことを念頭に置き、「表現」を定義した。学習指導要領（文部科学省2009a, 2009b）にも書かれてあるとおり、音楽の表現活動に興味や関心を深め、生活の中で音楽活動を行うことが感性を生かした豊かな生活の礎となると考え、研究に取り組んでいくこととした。

2 研究の方法

音楽グループでは、U. フリック（2013, pp. 303～309）の「質的研究におけるビデオの使用」を参考に、自然な授業を行う「フェーズA」、豊かな表現をめざし、支援を改善しながら授業を行う「フェーズB」、自然な授業を行いフェーズAとの比較を行う「フェーズA'」を設定し、映像とエピソードを記録して進めた（表1）。ビデオ映像を用いて「フェーズA」と「フェーズA'」の演奏の様子を比較するとともに、書き留めたエピソード記録をもとに音楽的表現に向かう時の様子の変容を確認した。

	フェーズA (自然な授業)	フェーズB (アプローチを行う実験的な授業)	フェーズA' (自然な授業)
小学部	音楽づくり「このおとなのおと①」	音楽づくり「ほしぞらのおんがく」	音楽づくり「このおとなのおと②」
中学部	創作「音の絵の具①」絵の中の音楽 ・ブリューゲル「子どもの遊び」	創作「音の絵の具②」 サウンド・エデュケーションを中心とした実践 ・リスニング・ウォーク ・音楽の形式 等	創作「音の絵の具③」絵の中の音楽 ・歌川広重「大はしあたけの夕立」
高等部	器楽「バンドに挑戦！」 ・楽器の選択	器楽「バンドに挑戦！」 ・演奏練習	器楽「バンドに挑戦！」 ・自由演奏

表1 各学部での取組

研究の対象事例を選出するにあたり、音楽グループで発達年齢を踏まえた上で表現の段階を検討した（表2）。音楽表現をやってみようとする1段階、音や音楽を実際にやってみようとする2段階、工夫をしてみようとする3段階と、音楽の表現活動に対する興味や関心が発達年齢の上昇ともに深まっていくように考えた。対象となる児童生徒は、表現の各段階から1名ずつ（小学部3名、中学部3名、高等部3名）の合計9名を抽出して各フェーズにおける活動や演奏の様子を分析した。

1段階 やってみようとする	2段階 やってみる	3段階 工夫する
「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で様々な音や音楽の経験を通し、演奏してみようとする。	「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で様々な音色や雰囲気の違いに気付き、演奏する。	「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で様々な音色や雰囲気の違いが伝わるように、編成や演奏方法を工夫する。

表2 音楽における表現の段階

3 研究の経過

(1) 小学部の取り組み

小学部の音楽の授業は、小学部1学年男子2名、女子1名、2学年男子2名、3学年男子3名、4学年男子1名、女子2名、5学年男子2名、6学年男子2名の計15名の児童を対象としている。曲の好みはそれぞれ異なるが、音楽活動が好きで、音楽が流れると自然に歌い出し、体を動かして楽しんでいる。通常の授業では、歌唱、器楽、身体表現、鑑賞の題材を一時間の中にバランスよく組み入れて授業を構成している。また、歌や器楽、ダンス等の音楽活動を通して表現力を養ったり、様々な曲への興味や関心を広げたりすることを目指して取り組んでいる。継続して取り組むことにより、手拍子や打楽器による簡単なリズム打ちができるようになってきている。

ア 研究の詳細

(ア) フェーズAの様子(図1)

フェーズAで取り組んだ「このおとなんのおと？」では『音さがしの本』(シェーファー&今田2009,p.58)を参考にしつつ、児童の実態の幅に合うように絵や動画を取り入れた。小学部では初めての試みであったため、活動内容の理解が難しいと考えられた。そこで、最初に全体での活動を行い、その中で運動会の絵を大玉転がし、玉入れ、応援合戦等のテーマごとに提示し、一つずつ内容を確認し、「どんな音がする？」という言葉の掛けながらいろいろな音を出す活動を行った。

1段階の児童は、絵を見て絵の中の人が何をしているか、大玉や太鼓等の道具があることを話すことはできるが、雰囲気の違いや内容を理解することは難しい。楽器には興味があり、好きな音が出る楽器や見た目が好きな楽器を手に取り、自由に鳴らしていた。

2段階の児童は、絵を見てテーマごとの違いを感じることが出来る。テーマによって音の強さを変えたり、楽器の鳴らし方を変えたりすることは難しいが、自分がどのテーマを演奏しているか答えることができる。楽器を鳴らすことは全員好きで、演奏終了の合図があるまで自由に楽器を鳴らしていた。

3段階の児童は、絵の内容を理解できる。テーマによって楽器の鳴らし方を変えながら、自分なりに絵のイメージの音を出そうと、考えて演奏している様子が見られた。演奏の途中でテーマを変えて楽器の鳴らし方を変える児童もいた。



図1 フェーズAで取り上げた教材の一例

	1段階	2段階	3段階
児童	小1・男 2名 小2・男 1名 小5・男 1名 小6・男 1名	小1・女 1名 小2・男 1名 小3・男 1名 小4・女 1名 小6・男 1名	小3・男 2名 小4・男 1名 小4・女 1名 小5・男 1名
教師	2名	2名	2名

表3 活動グループ(段階別)

(イ) フェーズBの様子

アプローチを行う「フェーズB」では、「ほしぞらのおんがく」(教育芸術社2015,p.50)の題材を取り上げ、全体で動画を見て学習したり、個人ごとに発表したりする学習を行った。この題材では、徐々に変化する空の様子に合わせて、鉄琴、トライアングル、鈴を鳴らしていた。その中で、演奏する人数を一人で、友達と、みんなと、と変化させたり、友達の発表を聞いて感想を発表する場面を設定したりすることで、実態の幅が広い集団での学習に対応できるよ



図2 フェーズA'で取り上げた教材の一例

うに配慮した。

（ウ）フェーズA'の様子（図2）

フェーズAとの比較を行う「フェーズA'」では、Aと同様にいくつかのテーマを組み合わせた絵を見て、その絵から感じ取った音を表現する活動を行った。楽器選びも授業ごとに児童それぞれが好きな楽器を選んだ。活動のグループはフェーズAと同じである。

1段階の児童は、フェーズAの活動時とは異なる楽器を選択して演奏に取り組んだり、他の児童が使用している楽器に興味をもち、その楽器を演奏しようとしていた。

2段階の児童は、自分が選択した楽器の音を友達に聴かせようとしたり、自分で考えて楽器の配置を工夫したりしていた。演奏の途中に教材の絵に視線を向け、楽器の奏法を工夫する様子も見られた。

3段階の児童は、グループ内でクイズを出し合い、絵の中のどの箇所を表現しているのかを当てる活動をした。また、友達と一緒に演奏する時には、提示された絵だけではなく、友達の演奏も交互に見ながら合奏する場面が見られた。

期 間	日 付	題 材 名
フェーズA'…4時間 音楽づくり「このおとなのおと①」絵の中の音楽	8月31日	・（全体）簡単な絵を見て音を出す。（教師も一緒に演奏に参加）
	9月 6日	・（全体）絵を見てみんなで鳴らそう。
	9月13日	・（グループ）グループ練習（支援なし）
	9月20日	・グループの楽器演奏（支援なし）
フェーズB…5時間 音楽づくり「ほしぞらのおんがく」 教科書を中心とした実践	11月 1日	・（全体）楽器の奏法についての学習、振り返り
	11月 8日	・（全体）映像の解説、振り返り
	11月15日	・（個別）発表会の練習、振り返り
	11月21日	・（個別）発表会の練習、振り返り
	11月29日	・（個別）発表会、感想発表
フェーズA'…4時間 音楽づくり「このおとなのおと②」絵の中の音楽	1月17日	・（全体）絵の紹介、グループ発表
	1月24日	・（グループ）グループ練習
	1月31日	・（グループ）グループ練習
	2月 7日	・グループの楽器演奏、個別の楽器演奏（支援なし）

表4 小学部における研究計画の詳細

イ 対象児童の実態と変容 <1段階>（O. K）

【フェーズA】

初めて取り組む活動であったため、活動内容への見通しをもつことができるように、情報量の少ない練習用の教材を用意し、教師がやり方を見せた。O. Kは、提示された絵を一つずつ見て、タンブリンで演奏に取り組んだ。遅いリズムや速いリズム、大きい音や小さい音を出すように教師の示範を参考にして活動に取り組んでいた。タンブリンによる演奏では、音の強弱や速さに変化は見られなかったが、興味のある歌や言葉を口ずさみながら音を鳴らしていた。全体の絵を見て、いろいろな楽器の中から自由に楽器を選択し、音を出す活動では、肩に掛ける太鼓を選び、太鼓の縁や硬い部分も叩き、色々な音やリズムを楽しそうに鳴らしていた。

【フェーズB】

題材への関心、意欲をもつことができるように、動画での映像提示、児童の音楽表現に対する称賛、経験のない楽器を提示するなどの支援を行った。

O. Kは、今までは主に太鼓等の打楽器に興味をもつ傾向があったが、今回の支援により、鉄琴やトライアングルなど、金属製の楽器への興味を示した。また、今までは自分のペースで楽器を操作する場面が多かったが、フェーズBでは画面に映された映像を見ながらトライアングルや鉄琴を鳴らしていた。



図3 フェーズBで活動に取り組む児童O. K

【フェーズA'】

グループでの発表では、好きな太鼓を選んで2本のバチで太鼓の縁などを叩き、音をいろいろ変えながら楽しそうに演奏していた。個人発表の際には、青いハンドベルを選び、時々絵を確認しながら鳴らし、大きい音や小さい音、振り方を変えてみたりして、踊るように楽しみながら音を鳴らしていた。フェーズAの時には使用しなかったハンドベルを、自分で選んで発表したところを見ると、音や楽器への興味の幅が広がった可能性がある。

ウ 対象児童の実態と変容 <2段階> (S・I)

【フェーズA】

S・Iは、怒った表情や大きな動物の絵を見て音を出す活動では、手のひら全体を使ってタンバリンを強く叩き、小さい動物は指先で優しく叩いていた。全員で行った活動では、ギロを選び、周りの友達が様々な楽器を鳴らしている様子を時々見ながら楽器を鳴らしていた。

【フェーズB】

題材への興味・関心、意欲をもつことができるように、動画での映像提示、児童の音楽表現に対する称賛をし、楽器での表現の幅を広げるために、小さい音から大きな音までいろいろな音の出し方の練習をみんなで行う場を設定した。トライアングルの右端を上下に同じようなリズムで叩いて音を出していた。星空のアニメーションをあまり見ていない様子だったが、星空を表現するように弱く叩いて音を出していた。アニメーションの最後の、夜明けの場面ではさらに弱い音に変えて演奏を終えた。



図4 フェーズBで活動に取り組む児童S・I

【フェーズA'】

全体練習ではマラカスやハンドベルを選び、前後、左右に振って音を出していた。友達に音の大きさを指摘されると、音の強さを変えて友達の反応を見て楽しんでいた。グループ練習の1回目はスレイベルを選び、耳元に近付けて音を聴きながらハンドベルのように鳴らしていた。発表会ではハンドベルを選び、いろいろと持ち替えて、演奏の終わりを自分で決め「終わり」と伝えていた。友達の様子が気になり、話しかけながら演奏していたが、時々、音を確認するように絵に視線を送っていた。自分が出している音に対する友達の反応を気にする様子が見られ、絵の題材や友達の反応によって、小さい音を出そうとすることができるようになってきた。

エ 対象児童の実態と変容 <3段階> (S・H)

【フェーズA】

絵のパーツを一つずつ見ながらの活動では、速く叩くときはタンバリンを床に置いて両手を使って叩き、弱く叩くときには指先で優しく叩くなど、自分で工夫して叩いていた。また、全員で行った活動では、何の音を自分で鳴らしているのか、友達の音がどんな音に聞こえたのかを言葉で伝えながら活動していた。

【フェーズB】

題材への興味・関心や意欲をもつことができるように、動画での映像提示、児童の音楽表現に対する称賛の他に、友達のよかったところを発表する場を設けたり、まねをしてみるように促したりし、自分自身で思考・判断をする機会を設定した。

児童S・Hは、星空のアニメーションを確認しながら音の強さや楽器を叩く場所を工夫して演奏していた。また、演奏



図5 フェーズBで活動に取り組む児童S・H

する順番を最後にして、演奏が終わってから気を付けたことや、よいと思った友達の演奏、取り入れてみたことを聞くと、上級生の名前を挙げ、音をつなげるところをまねしたと発言した。周りの友達の演奏を一生懸命聞き、意見や感想を積極的に述べていた。

【フェーズA´】

グループ練習では、友達との音当てクイズに積極的に参加し、同じ絵の音をやってみたくて手を挙げた。の中で、友達のまねではないが、自分なりに似たような音を出してみたり、みんなで合奏してみたりと音楽活動を楽しんでいた。フェーズAでは友達が合奏している時に耳を塞ぐなどの仕草が見られたが、フェーズA´では、友達の演奏を積極的に聞き、音当てクイズをしたり、友達と一緒に演奏したりすることを進んで行っていた。今までは自分の中になかった音や考えつかなかった音を受容し、それを共有できるようになってきた。

(2) 中学部の取り組み

中学部の音楽の授業は、中学部1学年男子3名、女子3名、中学部2学年男子4名、女子2名、中学部3学年男子4名、女子2名、計18名の生徒を対象としている。ほとんどの生徒は歌うことやダンスをすることなどに意欲的に取り組んでいるが、以前に経験した辛い音楽の授業経験から積極的に授業へ参加できない生徒もいる。

中学部では、創作「音の絵の具」というサウンド・エデュケーション¹⁾を中心とした音楽の創作の題材を扱った。この創作を中心とした題材は、平成26年度より、中学部の音楽の授業で実施しており、イヤークリーニング²⁾、リスニング・ウォーク³⁾、サウンドマップ⁴⁾作りなどの音の知覚を促す活動を通して感じ取った肌理⁵⁾を、音や音楽で表現していく題材である。特別支援教育学習指導要領解説中学部（文部科学省2009a,p.339）の音楽の内容にも記載してあるとおり「自然音、生活音、あるいは、あまり聴いたことがない楽器の音色に興味をもって聴いたりするなどの鑑賞に関すること」から始まる音楽活動の一例である。授業計画は以下の通りである。

期 間	日 付	題 材 名
フェーズA…3時間 創作「音の絵の具①」絵の中の音楽 ・ブリューゲル「子どもの遊び」	5月23日	音の絵の具オリエンテーション
	5月24日	音を探す
	5月31日	発表
フェーズB…10時間 創作「音の絵の具②」 サウンド・エデュケーションを中心とした実践	6月 2日	紙コップのなかみはなんじゃろなゲーム
	6月 7日	紙コップのなかみはなんじゃろな 答え合わせ
	6月 9日	音でお話 紙コップを使っておしゃべりをする
	6月14日	音を回す
	6月21日	大きくして音を回す ラーメン 餃子
	6月23日	ボディーパーカッションに移行
	6月28日	イヤークリーニング
	6月30日	リスニング・ウォーク
	7月 4日	サウンドマップ作り
	7月11日	サウンドマップ完成
フェーズA´…2時間 創作「音の絵の具③」絵の中の音楽 ・歌川広重「大はしあたけの夕立」	7月12日	導入
	7月14日	発表

表4 中学部における研究計画の詳細

1) M.シェーファーが1960年代に音環境に対して感受性に富む人を育て上げ、その力によって望ましい音環境を作りあげようとする音楽教育法の一つ。
2) イヤークリーニング【EAR CLEANING】音をはっきりと聴き分けることを目的とした耳の訓練のための体系的プログラム、特に環境音を対象とする。（M.シェーファー 2006 p.562）
3) 音聴き歩き【LISNING WALK】は聴くことに集中して単に歩くこと。音の散歩【SOUND WALK】とはガイドを用いて特定の地域のサウンドスケープを探索すること（シェーファー 2006, pp.428-429参照）。
4) リスニング・ウォークの音の調査結果を一枚にまとめた地図。
5) 皮膚や物の表面にある肌理のように、今田（2007）は音にも肌理があることを指摘している。一例ではあるが、一粒の水の滴の音は透き通った肌理を感じさせるが、水の滴が多くなり雨になると奥行のある荒い肌理を感じさせる。川のせせらぎや大河となるとまた違った肌理を感じ取ることができる（小枝 2016,p.15）。

ア 研究の詳細

(ア) フェーズAの様子

自然な授業を行う「フェーズA」では、P. ブリュッセル「子どもの遊び」の絵から感じ取った音を、音楽室にある楽器を使って表現する活動を行った。実践にあたり、生徒の表現における実態に合わせて3グループに分けて実施した。

	1段階	2段階	3段階
生徒	中1・男 1名 中1・女 1名 中2・女 1名 中3・男 1名 中3・女 1名	中1・男 1名 中1・女 1名 中2・男 1名 中2・女 1名 中3・男 2名	中1・男 1名 中1・男 1名 中2・男 3名 中3・男 1名 中3・女 1名
教師	2名	2名	1名

表5 活動グループ

1段階にあたる生徒は、絵に注目することが難しく、生徒が絵に注目できるようにする支援が必要であった。教師が絵の水辺に注目するように促し、どのような音が出ているのかを個別に問いかける。それに対して生徒はオノマトペで答え、それに近い音を探し出すという様子が見られた。このような活動を数回繰り返し、最後に生徒が絵の中から音を探し出していた。太鼓、カバサ等の楽器を選び、演奏に臨んだ。

2段階の生徒は、1段階の生徒よりも個別の問いかけが少なく、全体に対する発問や指示で活動が進んでいく。生徒の思考に要する時間に差はあるものの、絵の中の人物や遊び道具に注目して表現する音を選ぶ様子がうかがえた。ギロ、オーシャンドラム、シェーカーなどの楽器を選び、中1男子生徒の掛け声で始まり、中間部は自由演奏、中3男子生徒の音で終わるという形式で演奏に臨んだ。

3段階の生徒は、全体への問いかけで活動内容を理解し、生徒間で人物の表情について話し合いながら活動を進めていた。水辺や木等の自然物へと注目して音を探し、アゴゴ・木魚、スネア、マラカス・木琴等の楽器を選択し、一人で複数の楽器を演奏する生徒もいた。

(イ) フェーズBの様子

「フェーズB」では、M. シェーファー&今田（2009）「音探しの本」を参考に中学部生徒全員を対象に授業を進めた。この本では、紙という素材を通して音楽の創作を行う活動が記載されているが、今回の研究では、紙コップを用いて実践した。紙コップの中にビーズ、木片、砂等を入れてシェーカーを作成した。そして6種類の音を用意し、生徒一人一人が紙コップシェーカーを選ぶアイスブレイクを行った。その音を使ってグループ分けを行った後に、自分のマラカスを使用して「音楽の形式」の学習を行った。「音楽の形式」の学習を行う際には、ある程度のルールを全員で共通理解して行う必要があり、実態の幅の広い集団では、その音楽的効果を成立させるために多くの時間を必要とした。

それ以後は、イヤークリーニング、リスニング・ウォークなどの一連のサウンド・エデュケーションのプログラムを取り上げ、当たり前前に身の回りにある音環境に興味・関心をもつことができるように支援をした。

(ウ) フェーズA'の様子

フェーズAとの比較を行う「フェーズA'」では、安藤広重「大橋あたけの夕立」の絵から感じ取った音を、音楽室にある楽器を使用して表現する活動を行った。活動のグループはフェーズAと同じである。

1段階の生徒は、絵を見てからの創作活動へも慣れてきており、フェーズAよりも教師からの働き掛けが少なくなってきた。生徒が楽器を選定することができるようになっていた。

2段階の生徒は、絵に描かれているものから連想し、蛙の鳴き声や雷の音を再現する様子が見られた。

3段階の生徒は、絵の様式から「和」というキーワードを連想し、お寺の鐘の音や和太鼓の音を

取り入れようとしていた。



図6 P. ブリューゲル「子どもの遊び」



図7 安藤広重 「大橋あたけの夕立」

イ 対象生徒の実態と変容 <1段階> (F. A)

対象となる生徒は、中学部1学年女子生徒である。教師の指示を理解しているがわざと動かなかったり、椅子から落ちてみたりという行動は見られるが、身体を動かした表現活動を好み、音楽を聴くと踊り始めることがある。

【フェーズAでの様子】

教師から水辺の部分を指し「どんな音がする？」と問い掛けられると「分からない」と答えていた。さらに促すと、同じグループの生徒の意見を聞いて「海」と答えた。楽器を選ぶ際にもこの答えを参考として促し、カサバを選んだ。教師が、「遊ぶ子ども」を指し、同様の問い掛けをすると「分からない」と答えていた。友達の「パカ」「コロコロ」等のオノマトペを聞いて笑顔になり、自分の意見を述べることはなかったが、スレイベルを選択して演奏をしていた。最後に、教師からの働き掛けをせず、絵からの音を探すよう促すと、風船を膨らますような動作をしている人を指さし、音を再現しようとしていた。大太鼓を選択し、発表演奏に臨んだ。

【フェーズB】

音の肌理への関心を高めるために紙コップシェーカーを用意した。全員で使用した楽器ではあるが、普段授業中の移動や興味のない活動へは消極的な態度であった生徒F. Aが、繰り返し紙コップシェーカーを振り鳴らしている様子が見られた。また、自分のシェーカーを耳のそばで鳴らしたり、友達に聴いてもらおうとする様子も見られた。

【フェーズA'】

友達の「ゴロゴロ ドッコーン」という声に反応し笑っていたため、雨が降っていることに注目し、雷の音を想像したようである。フェーズAでの経験があったためか、教師からの支援が少なくても、スムーズに大太鼓を選び、演奏に臨んでいた。

ウ 対象生徒の実態と変容 <2段階> (I. Y)

中学部2学年男子生徒。身体の使い方にぎこちなさがあり、模倣動作が苦手であるが、楽器、歌唱、身体表現等に積極的に取り組む。

【フェーズA】

絵から音を探すことに時間がかかり、教師とやりとりをしながら音を選ぶ。水辺の音を再現するためにシェーカーを選択し、演奏に臨んでいた。終わりの合図をやりたいと、自分から手を挙げていた。

【フェーズB】

音の肌理への関心を高めるために暗い部屋で目を瞑り、リラックスして音を聴くイヤード・クリーニングの活動を実施した。耳との距離感を意識して教師が楽器を演奏した。炊飯器の窯の音や卵カッターの音が面白かったと感想を伝えた。

【フェーズA'】

雨が降っていることに注目してマラカスを選択し、演奏に臨んだ。マラカスを左だけ、右だけ、両手だと強弱をつけて演奏をしていた。

エ 対象生徒の実態と変容 <3段階> (O. M)

中学部3学年女子生徒。余暇活動としてダンスを楽しむ。振り付けをしっかりと覚えることができる。様々な活動に積極的に取り組む。

【フェーズA】

グループの友達と一緒に、絵の中で音が鳴っていそうな箇所を探し出し、積極的に意見を出し合って話し合いをしていた。太鼓を叩いているような人が絵の中にいたため、スネアドラムを選択し演奏に臨んでいた。

【フェーズB】

身の回りにある自然音、生活音への興味を高めるためにリスニング・ウォークの題材を設定した。校外を散策し、自由に音を聴く。発見する音は生徒それぞれで違い、好きか嫌いかを自分の感性で判断する活動である。O. Mは、草の上を歩いたときの音、友達の話し声等を見つけて発表した。

【フェーズA'】

安藤広重の絵を見て「和な感じ」と述べ、和太鼓を選択し、演奏に臨んだ。練習を重ねていくうちに、雨の音も再現しようとして、シェーカーも同時に演奏しようとして試行錯誤する様子が見られた。結果的にシェーカーで雨の音を、和太鼓で雷の音を演奏することができたと喜んでいて。

(3) 高等部の取り組み

高等部は音楽の授業を、1年4名(男子2名、女子2名)、2年4名(男子4名)、3年4名(男子2名、女子2名)の生徒12名で週2時間実施している。過去の苦い音楽経験から授業に積極的に参加できない生徒、好きな歌や演奏したい曲を探して意思表示できる生徒、曲の好き嫌いはあるが意思表示に支援を要する生徒と実態の差はあるが、音楽への興味・関心が高く、授業にも意欲的に取り組んでいる。

生徒達は、楽器演奏の経験が少なく、「楽器を間違えずに演奏できるか」、「リズムを正しく演奏できるか」という失敗を恐れる意識が強く、器楽に対して消極的な生徒が多い。一方、音楽番組やインターネット等でいろいろなジャンルの曲を聴き、音楽グループの名前や曲名、ドラムやエレキギター等の楽器の種類や奏法等についての興味・関心が高く、知識が豊富な生徒もいる。そこで、生徒の興味・関心の高いジャンルでよく耳にする曲を、自分がやってみたい楽器で演奏するというバンド演奏の題材に取り組むことにした。

指導を進めるにあたっては、楽器を正しく演奏するというだけでなく、いろいろな楽器に触れ、演奏方法を知り、「できた」、「やってみたい」という気持ちを引き出せるように、生徒達が演奏曲や楽器の選択していく。さらに、将来の余暇活動の一助となるように、簡単な楽譜の見方についての学習の機会も設定した。また、音に過敏な生徒や生徒同士の相性等も考慮して演奏グループを編成することで、生徒達が自分から授業に取り組めるように練習環境を整えるとともに、感想や活動記録を記入するワークシートを作成し、生徒達の気持ちを汲み取ることができるようにした。

期 間	日 付	題 材 名
フェーズA…4時間 器楽「バンドに挑戦！」 ・楽器選び	9月15日	・いろんなバンドの曲やPVを観てみる。
	9月29日	・自分で演奏したい楽器を鳴らしてみる。
フェーズB…10時間 器楽「バンドに挑戦！」 ・演奏練習	10月6日	・（個別）楽器の奏法についての学習
	10月13日	・（個別）楽器の奏法についての学習
	10月20日	・（個別）楽譜の見方
	11月24日	・（グループ）楽器ごとのグループ練習、演奏の工夫
	12月1日	・（全体）各グループの発表、合奏
フェーズA'…2時間 器楽「バンドに挑戦！」 ・まとめ	12月22日	・個別の楽器演奏

表6 高等部における研究計画の詳細

ア 対象生徒の実態と変容 <1段階> (J. R)

【フェーズA】

周囲の生徒が楽器を演奏している様子を見て、自分から大太鼓を運んできたが音を出そうとはしなかった。友達が出す音を聴いているが、自分で楽器を鳴らそうとすることはなかった。

【フェーズB】

J. Rが演奏への関心を高めることができるように、演奏曲の提示、称賛や励まし等の言葉を掛けるとともに、ドラムチームに所属し、太鼓演奏の簡単なリズムの練習を行った。

音楽に対する嗜好性がはっきりとあり、曲によっては鳴らさないこともあったが、好きな曲のメロディーを教師がピアノで弾いてタイミングを確認すると、合図に合わせて太鼓を叩くことができた。音を鳴らすごとに「すごいね」、「いいね」などの称賛の言葉掛けをすることにより、メロディーに合わせて音を鳴らすことができるようになってきた。

【フェーズA'】

教師の「好きな楽器を鳴らそう」という指示を聞いて、自分の好きな大太鼓をセッティングし、ドラムチームと一緒に太鼓を叩いていた。途中でいろいろな太鼓を持ってきて、自分の周りに置いて、バチも何種類かで叩き分けて音を出していた。

イ 対象生徒の実態と変容 <2段階> (Y. T)

【フェーズA】

エレキギターやエレキベースに興味をもち、持ち方や音の出し方は分からないが、自分から手に取り弦を弾いていた。演奏してみたい楽器を尋ねると、ベースの演奏を希望していた。左手でフレッドを押さえることはできないが、右手で弦を弾いて楽しんでいた。

【フェーズB】

Y・Tが演奏への関心を高めることができるように、興味のある楽曲を提示したり、演奏に対して称賛の言葉を掛けたりするとともに、エレキベースの奏法（図8）やTAB譜の見方の指導を行った（図9）。

ベースの持ち方、指の押さえ方、弦の弾き方等を確認したところ、いろいろな音程を鳴らすことができた。音を出せたことに喜びを感じ、他の音程の出し方を教師に質問し、練習に取り組む様子が見られた。よい音が出たときに意識的に称賛することにより、自信をもって意欲的に楽器を演奏しようという姿勢が見られた。タブ譜で押さえる弦を色分けするなど、提示の仕方を工夫することにより、押さえる弦や弾く場所を自分で確認して演奏することができた。TAB譜の見方が分かると、もっといろいろな曲が演奏できることを伝え、自分が演奏したい曲を教師に伝えてきた。最終的には、教師からの支援はほとんど無く、同じエレキベースのメンバーと音やリズムを確認しながら練習に取り組むことができた。



図8 生徒Y・Tに提示したエレキベースの持ち方の教材

ベース TAB譜

5+	5+	5+	3+
		3+	3+
			5+
			5+

リンダ リンダ リンダ リンダ

図9 生徒Y・Tに提示したエレキベース用TAB譜

【フェーズA'】

楽器の自由演奏の指示を聞き、自分からベースやアンプをセッティングし、今まで演奏した楽曲のベース部分を友達と一緒に演奏していた。今まで演奏したTAB譜を見ながら、友達とリズムを合わせながら演奏することができるようになっていた。最後にワークシートの感想の記述を見ると、「ベースの演奏ができました。もっといろいろな曲を弾きたいです。」と意欲的な記述がみられた。

ウ 対象生徒の実態と変容 <3段階> (R・S)

【フェーズA】

友達同士のやり取りで気持ちが落ち込み、楽器をやりたくないと言ったと楽器に触れることなく、演奏したい楽器を答えるアンケートは未記入であった。授業終了後、友達に「ドラムはできるわけない」と言われたことに対して気持ちが落ち込んだと教師に訴え、本当はドラムを演奏してみたいと伝えてきた。

【フェーズB】

R・Sの演奏への関心を高めることができるように、「リンダリンダ」「スモーク・オン・ザ・ウォーター」等、好きな楽曲を提示した。ドラムの設置方法を指導するとともに、ドラム譜の見方の指導を行った。

繰り返して指導を行っていくことにより、ドラムのそれぞれの

パーツや設置方法を学習し、一人で楽器を準備や後片付けができるようになった。左右の手足をバラバラに動かすことに難しさを感じていたが、手のリズム、足の動きなど、スモールステップで演奏練習に取り組んだ。練習を繰り返すことで少しずつコツをつかみ、リズムを刻むことができるよ

ドラム スコア

スネア (ハイハット) タムタム (ロータム) フロアタム ハイハット クラッシュ

バスドラム (リムショット) ユーザン ライド

リンダ リンダ リンダ リンダ

図10 生徒R・Sに提示したドラム譜

うになったことが自信につながっていった。

ドラム譜の見方を覚え、簡単なリズムは譜面を見ながら演奏することができるようになった。少しずつリズムを複雑にしていくと、譜面を見ながら自分で演奏しようとする様子が見られた。リズムが分からないときは、分かるまで何度も示範を見たり、自分で叩いてみたりして、意欲的に取り組む姿勢が見られた。普段聞いている楽曲を思い出し、ドラムのリズムを演奏しようとする様子も見られるようになってきた。

【フェーズA'】

時間になると進んでドラムを設置し、演奏練習に取り組んだ。友達と「リンダリンダやるか」と言葉を掛け合い、テンポを確認しながら合わせて演奏を楽しんでいた。音楽終了後には、「この曲のリズムはどうやるの?」、「このドラムは難しい?」などと教師に質問した。最後のワークシートの感想には、「フィルインがむずかしい」「もっといろんな曲をやってみたい」「一曲ぜんぶやってみたい」という関心、意欲が高まった記述がされていた。

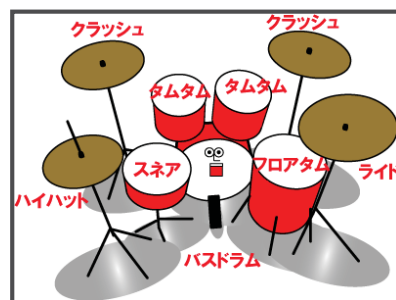


図 11 生徒R、Sに提示したドラム配置図

3 成果と課題

音楽グループでは、小学部、中学部、高等部が児童生徒の実態を踏まえた上で題材を設定し、実践を進めてきた。対象となった児童生徒は異なるし、授業を行った教師も違う。題材も違う。そのため、一般化された答えを出すことはできない。だが、各学部で共通して模索したことは、「鑑賞」や「表現（歌唱、器楽、身体表現、創作）」における相互の活動の中で作られた音や音楽への興味・関心を深めていくために、いかに児童生徒が授業の中心となり音楽表現へ取り組むことができるようにするのかという点である。

小学部では、音楽づくりの実践を行う中で様々な楽器に興味をもち、一つの楽器でも色々な使い方や色々な音が出せること、音を聞いて場面や映像のイメージができるようになることで、周りの友達との音の感じ方の違いを共有でき、音の好き嫌いなど音や音色に対しての興味・関心の高まりが見られた。児童の発達年齢や音楽の実態を踏まえた支援を行ったことで、興味・関心の高まりにつながったと言える。

中学部では、創作「音の絵の具」の実践を行うことで、教師が生徒の表現を許容し、共に考える授業となっていた。オープンエンドな活動のため、生徒と教師が模索する様子も見られ、アクティブラーニングへとつながる片鱗も見えていた。また、安藤広重の「大橋あたけの夕立」中の音を探す活動の際には、雨が降っている様子から蛙の鳴き声や、絵の世界の中にありそうな鐘の音等を考えて再現している生徒も見られた。音楽の創作の活動ではあったが、視点を変えて考察すると美術的な鑑賞も深まっている可能性があると考えられる。

高等部では、器楽「バンドに挑戦!」の実践を通し、興味・関心が高い現代のバンド曲を自分達の好きな楽器で好きなように演奏できるという体験をすることで、楽器演奏に対する苦手意識が強く、決められた楽器しかやってこなかった生徒達の楽器に対する偏見や技術面での自信のなさが払拭されたと感じる。何よりも、フェーズAでは、「楽器はやりたくない」、「バンドをやる自信がない」などと言っていた生徒が、フェーズA'では「もっとこうしたい」、「もっとこういうふうに演奏したい」と意欲的に演奏に取り組む声が聞こえてくるようになったことが大きな成果であると考えられる。

研究データの取り方をはじめ、児童生徒が触れることができる楽器が少ないこと、教材の提示や環境設定、教師のアプローチを工夫することなど、本研究での課題は多々ある。今後は、教師の支援が児童生徒に表現を「させる」ものにならないよう、児童生徒の「いま・ここ」にある自然な表現を育むための実践を考えて取り組んでいきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 今田匡彦・齋藤隆博 (2007) 「音楽の肌理について—Jポップは聴こえない」『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 5 no. 1. pp. 6-16
- 2) 石塚謙二, 全国特別支援学校知的障害教育校長会 (2011) 『知的障害教育における学習評価の方法と実際』 ジーアス教育新社
- 3) 小枝洋平 (2016) 「知的障害を有する生徒とのサウンド・エデュケーションの実践—創作『音の絵の具』の活動を通して」『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 14 pp. 15-23
- 4) シェーファー, R. マリー (2006) 『世界の調律—サウンド・エデュケーション』 鳥越けい子他訳, 平凡社
- 5) シェーファー, R. マリー・今田匡彦 (2009) 『音さがしの本—リトル・サウンド・エデュケーション』 春秋社
- 6) U. フリック (2013) 小田博志他訳『新版 質的研究入門—〈人間科学〉のための方法論』 春秋社
- 7) 文部科学省 (2009a) 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編 (幼稚部・小学部・中学部)』 教育出版
- 8) 文部科学省 (2009b) 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編 (高等部)』 海文堂
- 9) 『小学校のおんがく I』 (2015) 教育芸術社